

○ 魔法のランプ プロジェクト 2013年度レポート○

1 アラジンと魔法のランプ

魔法のランプと聞けば、多くの方は「アラジンの魔法のランプ」をイメージするに違いありません。魔法のランプを擦ると中から魔人が現われて願いをかなえてくれるアラビアンナイトの中のあの物語です。今回の魔法のランププロジェクトでは、アラジンが学校で学ぶ障害のある子ども達、タブレットを魔法のランプと考えることも出来ます。子どもたちがタブレットを操作して魔人であるアプリを使って夢を叶えること実践が沢山みられました。

すぐに魔人に頼って金持ちになっていったアラジンを批判的にみることもできるでしょう。しかし、アラジンは極貧という経済的ハンディを背負った状態の中、出来ることがとても制限されていたという点を忘れてはいけません。それがランプの力で余裕ができるうちに人のことも考えられるようになり、最後は王様になって民衆に慕われたという点です。

障害のある子どもがタブレットを使うのは安易だと考える人もいますが、彼らにタブレットを使わずにただ努力しろというのは酷なことでもあります。障害のある子どもの中にもタブレットなしで勝負出来る子もいるでしょう。しかし、子どもたち誰もが出来る訳ではありません。出来る子どもでも、人一倍努力してやっと人並みのことが出来るようになったわけですし、努力をするためにはそこに時間を費やす必要があります。限られた時間を得意なことを伸ばす時間に使えば、もっと才能が発揮出来るかもしれません。

魔法のランププロジェクトの中で、一人で買い物が出来るようになった、コミュニケーションに困難のある子どもがいます。とにかくがんばって会話しなさいと言われても、話せない彼にとっては大きな勇気が必要でした。タブレット PC が助けると気持ちにも余裕が生まれます。だからこそやってみようという気持ちが起こります。安易な道具でなく、子どもが一步を踏み出すことを少し補助してくれる道具ととらえてはどうでしょう。



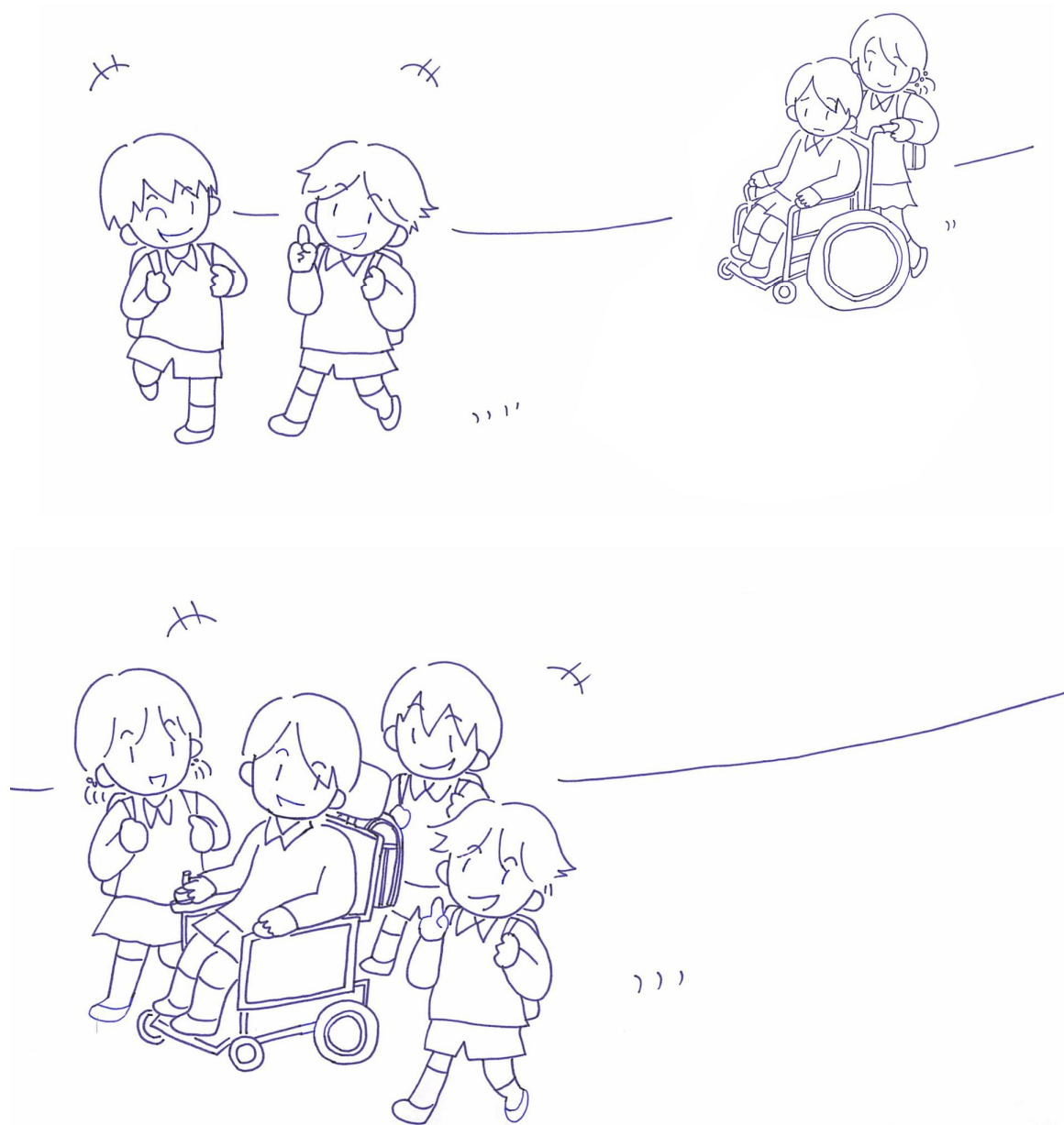
2 タブレットとインクルーシブ教育システム

2014年1月20日、障害差別を禁止する国連の障害者権利条約に我が国も批准しました。今後、障害のある子どもたちのインクルーシブ教育システムが整備されていくものと思われます。文科科学省は「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）概要」において、「インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である」としています。

米国ではインクルーシブ教育に支援技術（AT:Assistive Technology）の活用が不可欠だと考えられています。なぜなら障害のある子どもたちが学習・コミュニケーション・移動能力を補償されないまま学校に参加すると、必要以上に努力が求められるだけでなく、場合によっては他者に依存せざるをえなくなるからです。例えば、努力しても読み書きが苦手な子どもは、成績が低いのは努力不足だと指摘され、自信を失い、勉強が嫌いになっていくことがあります。コミュニケーションできない子どもはどうでしょうか？発話が不明瞭であればなかなか聞き取ってもらえません。遊びに夢中な子どもたちのスピードの会話の中に割り込むのは大変であり、勇気のいるものです。さらに、歩けない子どもは教室の移動に時間がかかるため、補助教員やクラスの友達に依存するしかありません。ゆっくり移動したり、途中で寄り道したりといったコントロールは自分では行いにくく、どうしても他者に依存する形になってしまいます。AT無しに他の子どもと同じ教育を受けることにはデメリットもありそうです。

だからインクルーシブ教育システムの中では通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意してあるわけですが、特別支援教育の中では、将来の自立において大切な、様々な経験が制限される可能性があります。また、普通教育とは学習の方法や進度も大きく異なり、一度、特別支援教育のレールに乗った子どもたちが普通校へ戻ることは容易ではありません。

AT を使えばスタート地点を他の子どもたちに近づけることができますし、それにより、依存的になったり自信を失うことを防ぐことができます。タブレットをはじめとした AT の活用はインクルーシブ教育成功の鍵となるに違いありません。



3 タブレット利用と合理的配慮

学校活動を、自分が人に頼んでやってもらっても、自分が AT を用いてやっても、結果は同じかもしれません。しかし、他者に依頼するとそのプロセスは依存的にならざるを得ません。自立心を育てるためには、ある程度自分の周囲の環境をコントロールできる形においておく必要があります。AT はそのためのものだと考えていいでしょう。

インクルーシブ教育の中で最も難しいのは、特定の子どもだけがテクノロジーを活用するのをどのように受け入れるかという点です。AT の利用に不公平だと意見を唱える人がいます。特に試験場面においては、公平性が強く求められるためにワープロや電卓などの利用は慎重な意見が多いのが実情です。

障害者差別解消法が成立し、子ども達の学習における機器利用に合理性があるならば、その配慮が義務付けられるようになります。障害があれば誰もが支援を受けられるようになるのではなく、本人が配慮を申請してその合理性が認められればその配慮が受け入れられるものです。そこでコンセンサスを得るためには、日常の学習支援の記録から客観的エビデンスを示す必要があります。今後、日常のタブレットの利用の中で、子どもたちの学習記録をどのように収集・評価するかを考えておかねばなりません。



4 子どもの能力の拡張としてのタブレット

ランプをいつも手元において子どもたちが使えるようにするにはまだまだ課題も多いようです。しかし、タブレットやスマホのようなモバイル端末がウェアラブル化していくとどうなるのでしょうか？テクノロジーは子どもたちの身体の一部となっていくかもしれません。テクノロジーの進歩は急速であり、タブレットを利用する障害のある子どもたちが、障害のない子どもたちを追い越してしまう可能性もあります。事実、パラリンピックの競技をみるとすでにオリンピックの記録に追いついている分野もあります。子どもが魔法の道具としてタブレットを使って行くところといった能力の逆転が起こるかもしれません。

会社の中ではテクノロジーを活用して仕事をするのが当たり前の時代になってきています。子どもたち誰もが同じようにテクノロジーを使って学習する時代が来るとこういった議論はなくなるのかもしれません。今は障害のある子どもたちが時代の先端を走っており、これから障害のない子どもたちが追いついてくるわけです。

学習の本質は何かと考えていくと、実は「読み」「書き」「計算」「記憶」などといった能力は手段であって学習にとってあまり本質的な部分ではないことに気づきます。テクノロジーが補償しているのはまさにこういった手段にあたる部分です。記憶する知識が増大するのに対応して、情報をクラウド化し、誰もが情報端末で共有してそれを活用する時代が来ています。読み書きはパソコンで、計算は電卓で簡単に補えます。学習の手段はテクノロジーで補って、学習の本質の部分にこそ時間を費やす時代が来ています。



5 灯台下暗し 普段の実践を振り返る

多くの人がタブレットが照らす明るい未来を期待しているのですが、「灯台下暗し」という言葉にあるように、先ばかり見て足下が見えてない実践も見られます。言い換えれば、タブレットの先端的な機能にばかり注目して、子どものコミュニケーションの基礎能力や生活環境を考えていないケースがまだまだあります。

例えば、自分の意思表示が出来ない子どもに対してタブレットのコミュニケーションアプリで意思表示を求める試みが至る所で行われています。タブレットの中にシンボルや文字を入れ、それを見せながら選択させようとするのですが、音声・絵・文字と実際の飲み物・食べ物が結びついていない子どもにとってタブレットの中の文字やシンボルは何の意味もありません。ただ、タッチスクリーンの変化が起こることが楽しくてそれに触れる子どももいます。そこで触れた物が子どもの意思を反映していると考えるのは間違いだということに気づく必要があります。また、言語理解が困難な子どもにタブレットで文字を書けるようにする授業が行われています。もし、子どもがしゃべれたり、他の手段で意思表出が出来るのであれば、文字を教えて文章を綴ることが新しいコミュニケーション手段となる訳です。残念ながら、飲み物や食べ物の好みさえ分からない場合、文字を学習するのは作業でしかありません。こういった子どもたちにとっては、タブレットの導入以前に、実際の経験を通じて言語理解を促すことが重要です。

タブレットの導入は、これまでの実践を振り返ってみる良い機会になるに違いありません。



6 教師にとっての魔法のランプ

子どもたちの魔法のランプは、先生たちにとっても魔法のランプであったと言えるかもしれません。

先生たちが一生懸命教えても実現できなかったことを子どもたちがタブレットを使ってあっというまに成し遂げてしまうのですから。そういった子どもたちの変化を見ながら、魔法のランププロジェクトに参加した先生たちにも少しずつ余裕が生まれてきているように思えます。これまで何も出来ないと感じてすぐに介入していた場面でもタブレットを用いる子どもの可能性を信じて待つことが出来るようになってきています。タブレットを使わせるのではなく、子どもが自分にとって便利であり必要なものだと気づくように支援することが大切です。

このプロジェクトでは子どもたちが魔法のランプに光を灯したとも言えます。プロジェクトに参加した先生たちは、ICT時代の新しい教育について、向かうべき方向が少しずつ見えてきたのではないのでしょうか？学校におけるタブレットは一時的なブームだと言う人がいます。しかし、子どもたちの灯した光は決してこれをブームに終わらせないでしょう。今こそ未来の教育を考え、前に向かって進む時期に来ています。



「魔法のランププロジェクト」とは、東京大学先端科学技術研究センター・人間支援工学分野、ソフトバンクモバイル株式会社、株式会社EDUASの共同プロジェクトの名称です（2013年1月プロジェクト開始）。

携帯情報端末が、障害のある子どもの困りを支援する道具となって活用され、学習や社会参加に進めるよう子供達の持つ能力を照らし出す「魔法のランプ」となることを祈って名称が付けられた、障害のある子どもの自立を支援する研究や啓発活動を共同で行うプロジェクトです。

魔法のプロジェクト：<http://maho-prj.org/>

魔法のプロジェクトチャンネル：<http://www.youtube.com/user/mahoprj>

本件に関するお問い合わせ先：

<東京大学先端科学技術研究センター>

人間支援工学分野 問合せ先メールアドレス：office@at2nd.jp

<ソフトバンクモバイル株式会社>

カスタマーサポート ソフトバンク携帯電話から157 / フリーコール 0800-919-0157(無料)

<株式会社エデュアス>

問合せ先メールアドレス：info@eduas.co.jp